『三四郎』無意識の偽善者

Junko Higasa

漱石は、美禰子を「無意識の偽善者」(Unconscious Hypocrite)と規定する。「無意識」とは、夢遊病的に意識がないことではなくて、自分で自分の行いに気付いていないということで、「偽善者」とは、本心からではなく、うわべを繕う者のことである。

美禰子が、瞳の動きで三四郎を捕えてしまったのは、人間の認知以外の力の作用ではなくて、彼女の内面に潜む「種を残すための女としての生物的本能」の作用である。そこに彼女自身は気付いていない。したがって美禰子は、本能的に三四郎を捕えてしまったあとで、現実的には少し躊躇しただろう。男としてはO.K.だけれど、夫としては N.G. 都会的に洗練された先進的な美禰子と、田舎出の朴訥で呑気な三四郎では、当時の社会制度的感覚から見ても、生活観的相性から見ても、釣り合わない。兄も世間もおそらく認めないだろう。そして美禰子自身も、自分をその生活の中に投じることはできないだろう。美禰子はそれを心のどこかで承知していた。しかし理屈では割り切れない恋情は、夢の中で詩を詠うことを止めない。そこで美禰子は、三四郎を現実的に自分に相応しい位置まで引き上げようとする。その一方で、自分に相応しい相手である野々宮の嫉妬を煽る。そのために野々宮と三四郎を対比させる。三四郎には「ほら、野々宮さん(見てごらんなさい)」と言い、野々宮には、三四郎の傍に立ち「お似合いでしょう」と言ってみせる。しかしそれは二人を愚弄するためではなく、ほとんど本能の成せる業なのだ。それは自分の女としての価値を自他共に認めさせたいという願望に由来する。美禰子は世間の人々に、幾多の男たちに、自分の内心に、鏡に映る自分の姿に、女としての自分の価値を見出そうとしているのだ。したがって男たちの感覚に映るのは、自然の安らぎを感じさせない人工的な女である。もし美禰子が自分をそれほど価値ある女として提示しなかったら、状況は変わっただろう。

面白いことに同性であるよし子の言葉が、男の心境をよく表している。菊人形を観に行く途上で哀願逞しい乞食を見て、お金を『遣る気にならないわね』というよし子。凡ての人の注意と同情を惹きつつ頻りに泣き叫ぶ迷子を見て『私の傍まで来れば交番まで送ってやるわ』でも『追掛けるのは厭』『何故って―こんなに大勢人がいるんですもの。私に限った事はないわ』というよし子。男たちは美禰子の無意識の偽善に心惹かれながらも追いかけようとはしない。野々宮は「あれだけの女だから責任が負えない」と思い、気の弱い三四郎は「あれだけの女だからこそ」近づくこともできない。

美禰子は「お貰いをしない乞食」「迷子」と、自分の本心を訴える。けれど「索引の附いている人の心さえ中ててみようとはしない呑気な人」である三四郎には通じない。

ここで美禰子について、思い浮かぶものがある。『アーサー王の死』(サー・トーマス・マロリー Sir Thomas Malory 1399～1471)で、円卓の騎士ランスロット(Lancelot)と不倫する王妃グィネヴィア(Guinevere)だ。漱石は、それを『薤露行』として書き直している。美禰子は金冠を戴き、鏡を通してしか世間を見られない王妃のようだ。

結局、美禰子の夫となったのは『背のすらりと高い細面の立派な人であった。髭を奇麗に剃(す)っている。それでいて、全く男らしい』気弱な三四郎には到底敵わない相手である。彼が社会的に美禰子にふさわしい人物であるのは一目瞭然である。(2014.6.2)